

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 「総合」についての覚書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000477">https://doi.org/10.57529/0002000477</a>

## 「総合」についての覚書

### Memorandum of Understanding on “synthesis”

山本 哲也

YAMAMOTO Tetsuya

#### はじめに

筆者は1995年（平成7年）から5年間、國學院大學博物館学研究室の助手として務めさせていただき、故・加藤有次先生の傍に置いていただいたことで学んだことは実に多い。その中で、学生時代以来のことであるがよくお聞きしていたことに、展示というのは「総合展示」ではなく「総合展示」でなければいけない、という旨の話があった。つまり、「ハム心（はむごごろ）」の「そうごう（総合）」ではなく、「宗（むね）」とする「そうごう（総合）」でなければいけない、と言うのだ。それで、「総合」と「総合」とがどう違い、何をもって使い分けるのかを改めて考えずに、筆者は漠然としながらも加藤先生の言うままに信じ、それらしく話していたと言っても過言ではない。もちろん、加藤先生の博物館学の授業でその意味を確かに聞いていたはずにも関わらず、また教科書だった『博物館学序論』（加藤 1977）にはその意味が記してあるにも関わらず、である。そしてそれを改めて自分の言葉として説明できるか、問い直すことはほとんどしてこなかった。

そもそも明快に自分の言葉で「総合」と「総合」が説明できるのかと自問しても、そう言えるものはなかった。しかし2015年になって、「総合」、そして「総合」のことを考える機会を得ることとなった。博学連携プロジェクト<sup>(1)</sup>をともに推進していた金子和宏氏から、「展示は総合学習」（正確には「総合的な学習の時間」だが、以後も含め「総合学習」と記す）というテーマで講演をしてほしいとの依頼を受けたのだ。

展示を総合学習と考えた金子氏にどうしてそのテーマを考えたのか聞いたところ、筆者が担当する企画展は総合学習的な発想が見られると言うではないか。

自分では思いもよらず、と言うか、ある意味無意識と言ってもいい自分なりに作ってきた展示が「総合学習」であると言われ、そこで加藤先生の「総合」を思い出したわけである。

そのため自分なりに説明できるものを得るべく、講演資料の作成を進めることで、やっと自分の言葉で説明でき、腑に落ちる説明になったのではないかと考えるようになった。

そこでここに「総合」の意味するところ、そして、「展示は総合学習」からさらに博物館が総合学習であるべきこと、「総合博物館」ではなく「総合博物館」の発想の必要性について述べていくこととする。

## 1. 「総合」とは何か—「総」と「綜」から考える

### (1) 加藤有次の説く「総合」

「総合」と「綜合」は、そもそも何がどう違うのか。

その筆者の解釈を述べる前にまず、加藤有次の説明する「総合」について確認しておく。

『博物館学序論』の「第4章 現代博物館の基本理念」「第3節 総合博物館と郷土学」の「2. 総合博物館の機能的解釈」に「総合」についての説明がなされている。長文になるが、引用してみる。

では、「総合」という言葉の意味するところは何であろうか。漢字では、「総合」とか「綜合」とか書くのであるが、いずれも、個々別々のものを集め合わせることを意味する。したがって両者とも同義語として解釈されるのであるが、博物館の現実に即して考えれば、個々のものを集めただけの機能に尽き、あわせて考える機能の面が欠けているのではないかと考えるのである。

試みに、『秋田県立博物館設立基本構想』の一節を引用してみよう。

現在各府県にある総合博物館とは、人文系諸学問の何れかと、自然系諸学問の何れかが、同一博物館にあるから総合博物館と称している。例えば、歴史と自然史、考古と動物等々が並立的に設けられているが、総合とはただ単に集めたという意味でしかなく、いわば百科辞典的総合である。従ってその空間的処理の仕方（例えば部屋割り）にしても、自然科学部門展示室、人文科学部門展示室と区別されており、縦割りの学問系列による区分がなされ、ただそれが同一建物、或は場所内にあるというに過ぎない。

例えば、総合病院といわれるものがある。これは各専門分科を持つ病院のことで、その専門病院としての機能のみが重視され、各専門が集まったという意味にすぎず、総合的な面が軽視されている様に見受けられる。

勿論、その診療が専門化され、分科されることは、研究が細分化されるほど当然のことであろうが、しかし専門分化されるのは医者の方で患者という一人の人間ではない。例え総合病院といっても、種々の専門医が、同じ建物の中に居ることに過ぎないであろう。かかる欠点から、最近アメリカで、この不備を補い、患者という人間を中心とした医療制度が説かれ、実施されている。クリニカルカンファレンスと称されるこの制度は、従来の科別診療から、協力診療へという体制である。即ち、患者に対し、内科医を中心に、関連各科の医者が診療に当り、かつての病气中心の診療から、人間中心の診療へと移りつつあることが報告されている。

勿論、病院と博物館は異なるものであるが、博物館においても、従来の専門科別から、人間教育的方向に転換すべきであろう。

だから、総合博物館においても、従来の並存的集合ではなく、郷土誌 (Heimat Kund) を中心とした、つまり秋田学を中心とした、総合博物館を考えるべきであろう。

総合とは、分析され、分解されたものを再び一全体に結合する手続きである。一般的に言って、総合は分析よりも高度の機能であり、従って総合は直接的、間接的に分

析を前提としているといえよう。

つまり、秋田を風土的に総合した博物館ということである。

文中、この構想の担当者である倉田公裕氏は、総合から総合へと言葉の解釈を整理されている。その内容は詳述するまでもないが論理学的意味での「総合」、すなわちSynthesisの意味で使われており、それは、個々別々の概念または観念・判断を結合して、新しい概念・観念・判断をつくり出すことであるといわれている。その意味で個々別々の諸科学をただ結合するのみでなく、博物館の目的にかなった関係諸科学の結合から、「もの」を媒体として研究活動という行為をへて、一事象の新しい概念・観念・判断を生み出し、教育普及活動をすることにある。

したがって、言葉の上から、総合から総合へとということになるが、今日では当用漢字、教育漢字等、統一規定のおこなわれていることでもあり、前述の言葉の解釈をもふまえて、総合博物館あるいは〇〇市総合郷土博物館とする考えがもっとも妥当なところである。

以上のとおり『秋田県立博物館設立基本構想』の倉田公裕の言説を多用しつつも、確かに相応の説明を行っている。これをもっての説明でも何ら問題はないのかもしれない。しかし、時にひと（他人）から借りた言葉を使おうとしながら意図がややずれて、逆に説得力に欠けてしまう場合があるだろうし、だからこそ自分の言葉に置き換えることで、相手の理解を促す必要があると考えるのだ。それは、シナリオ通りに説明する“解説員”と、自分の言葉を使って説明する“解説者”の違いというわけである<sup>(2)</sup>。

## (2) 筆者の解釈による「総合」

では次に、筆者の解釈を記す。

「そうごう」は、『広辞苑』<sup>(3)</sup>には以下のとおり記載されている。

「そう-ごう【総合・綜合】(synthesis) ①個々別々のものを一つに合せまとめること。」

(以下略)

これによればつまり「総合」と「綜合」に相違はないのであり、本来同じ意味と解釈できる。それは加藤も指摘したとおりである。さらに言うと、「綜」は常用漢字に含まれなかったことで、「総合」に統一されていったことから「綜合」は世間的にはほとんど目にするのがなくなったのである。しかし、それをもって「綜合」に特に意味がないと断じてはならない。

そこで、「総」と「綜」として、それぞれ紐解いていくこととする。

まず「総」。

これは「ふさ」と読む。

「総（ふさ）」は、『広辞苑』では「糸を束ねて、その先端を散らし垂らしたもの。」と説明される。つまり、「総」というのは、「集める行為」と解釈できる。

それに対し「綜」は、常用漢字にないこともあり、そもそもこの一字で解釈されることはほとんどないと言って過言ではなく、したがってその一字の説明がなされることはほぼ皆無ではないだろうか。しかしそれを敢えて確認すると、「あぜ」と読まれることがあって、それは『広辞苑』では「機の経糸をまとめる用具。綜統（そうごう）。」とある。

また諸橋轍次（新潟県出身）の『大漢和辞典』<sup>(4)</sup>には「いとかけ」とか「すべくくる」とある。

ここで「あぜ」のみでの説明ではなかなか理解に及ばない可能性が高いと思われ、「いとかけ」と読まれることも鑑みつつ、機織に使用される機材で、「綜」よりも一般的名称として使われることが多い「綜統（そうこう）」で考えてみることにする。

「綜統」は、『広辞苑』では「緯糸を通す杼道を作るために経糸を上げさせる道具」とある。つまりここで、経糸と緯糸の関係が現れる。経糸と緯糸が織りなされて一枚の布になるというわけだ。「綜（あぜ）」は「まとめる」とあり織りなす意味とは直結しないものの、「総合」はまとめ合わせること、さらに「綜統」で考えると、まさに織りなす行為となるのだ。

以上から「総」は集める行為であり、それに対し「綜」は、「綜統」に代表されるように経糸と緯糸でもって織りなしていく行為につながると言えよう。つまり「綜」は、それぞれの関係性の中で意味をもって作り上げることにつながると考えることができる。

ちなみに、新潟県出身の歌人・宮柊二が作詞した新潟県三条工業高等学校の校歌に「綜（あわ）すべし学と生活」という一節があり、「あぜ」「いとかけ」などとは全く異なり、「綜すべし」は「あわすべし」と読んでいる（発音している）。『大漢和辞典』にもその読みはなく、「綜」を「あわす」とは本来読まないのではないかと思うのだが、その意味を理解した宮柊二だからこそ使い、読んだと言えるのではないかと思うのである。「あわす」ということは、「集める」ではなく「織りなす」に近いのではないかと、そう考えるのだ。

つまり「総」ではなく「綜」。

そして、「総合」（集める）ではなく「綜（織りなす）」と解釈するのである。

したがって、「総合展示」は様々な分野がただ集まっていることにすぎず、「綜合展示」は様々な分野が関係し合っただけで見せることで、さまざまな理解を促すものと言える。

それはつまり、加藤理論に結着するということになろう。

ただ、倉田公裕はアメリカの医療制度から「総合」を説明しようとし、加藤もそれを援用しているが、文字そのものの解釈は行っていない。そこを筆者なりに解釈しようとしたのが以上の説明ということなのである。

そこで考えるべきは、「総合的な学習の時間」、略称「総合学習」である。

上記の説明で行くと、「『総合』学習」は、多種多様な分野をそれぞれ学ぶことにしかならない。それは本来の意味の「総合的」にならないのではないか。つまり実は、「総合学習」ではなく「綜合学習」が正しいのだらうと考えるのである。しかし、常用漢字制定の中で「総合」ではなく「綜合」に統一されたことを今さら敢えて変える必要はないし、常用漢字に含まれない以上、学校で「総合学習」は使えないのである。

しかし、果たして学校で「総合」の意味と実質的に考え実行できているかどうか。必ずしもそうではない時もあるのかもしれないと思いつつ、できることなら意識の上で「総合学習」であってほしいと願うばかりなのである。

展示もまた然り。

本来めざすべきは、単なる「展示」ではなく、「綜合展示」でもなく、「綜合展示」であるべきということなのだ。

加藤理論の正当性は、これで補強し得たのではないかと考えるところである。

## 2. 展示の例から—総合展示の可能性—

では実際に総合展示とは何か、それを事例に即して述べてみたい。なお、以下の新潟県立歴史博物館の説明は「展示は総合学習」という求めに応じたものでもある。

### (1) 新潟県立歴史博物館の実践から

まず、筆者の企画展に「総合」的要素があるのか、またはそこに見られる「総合」の様相とは何であるのか、いくつかの事例を取り上げて確認してみたい。

#### ① 「かやぶき民家展—早津絵画から広がる世界—」(平成19年度)

かやぶき民家、即ち古民家の展示である。主題の「かやぶき民家展」のみなら、民俗展示と思われることだろう。歴史民俗を扱う館として当然のことと思う。しかしそこに副題が「早津絵画から広がる世界」とあり、その副題こそ「総合」としての面目躍如たるどころと考える。

早津剛氏は、新潟県を中心に全国のかやぶき民家を描く新潟県内在住の画家である。その作品のチカラを活用し、かやぶき民家についてさまざまな視点からその様相を探るものとした。

まず早津氏の作品を、地域、季節など多種多様な要素を選びつつ、まず最初に油絵作品(F50~F100サイズ)38点を使用し、会場前半を展開させた。「歴史博物館」で、まさに美術展示(美術館の様相)となり、副題で明かしているとはいうものの、「歴史博物館」でうたう「かやぶき民家」の言葉からは想定しづらい展示であった。かやぶき民家の多様な「顔」を見つつ、結論として何を示す企画展であるのかを考えてもらう場とした。もちろん、純粋に早津絵画を楽しむことのできるものでもあった。

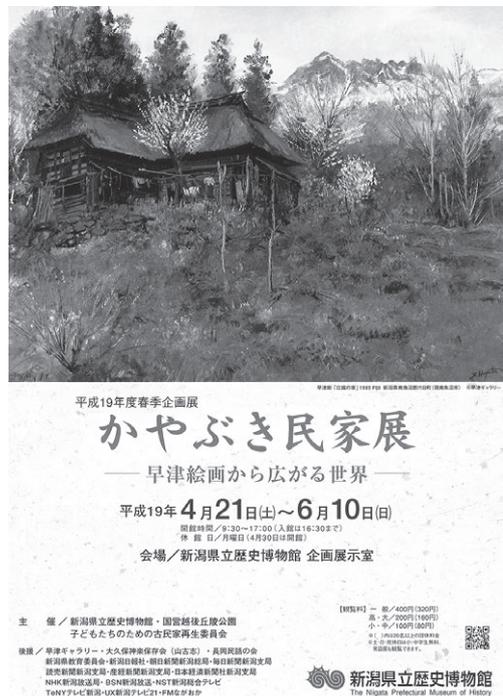
そして、かやぶき民家にまつわる民具類の展示や、再生活動や転用などさまざまな古民家の活用の現状及び現代的課題などを訴え、そして最後にまた早津絵画(F30サイズ5点)を展示し、以下のメッセージ(パネル)を付した。

絵による再生 再び早津絵画にて

かやぶき民家そのものを活用するのが、再生のすべてではありません。早津剛さんの絵画は、私達の心に消えていったかやぶき民家を再び生き返らせてくれます。

ここに改めて早津絵画をご覧いただき、もう一度かやぶき民家を見つめ直していただきたいと思います。

このように最後に改めて絵画作品を持つてくることで、美術展示の要素と民俗展示の要素を単に集めた「総合」ではなく、かやぶき民家を「総合」的に考える展示へと帰着させられたの



第1図 「かやぶき民家展」チラシ  
油絵作品を前面に出した広報を心掛けた

ではないかと考えているところである。

## ②「奇跡の新幹線―開業、震災、そして30年―」（平成24年度）

上越新幹線開通30周年を記念して開催した展覧会である。タイトルに「奇跡」と記したのは、さまざまな意味がある。

平成16年10月23日、新潟県中越地域を大地震が襲った。「新潟県中越地震」である。

その地震を新潟県としては「新潟県中越大震災」と呼ぶことで、甚大な災害を永久に忘れることなく記憶に留めることとしているのだが、その震災で新幹線史上初の脱線事故が発生。しかし、死傷者ゼロという「奇跡」が起きた。展示の冒頭では、その脱線状況写真を拡大写真で見せ、いかにも震災での奇跡を見せるかのようなプロローグだった。ただ、それを「奇跡」と言うのは尚早であることを



第2図 「奇跡の新幹線」の展示から  
縄文土器（三条市長畑遺跡）の展示状況

展示では伝えることも一つの目的とした。新幹線開発においては脱線復旧訓練なども行われているため、脱線は想定内なのである。もちろん、脱線と言う事態は死傷者を出す危険性の高いものであり、その中で死傷者ゼロは奇跡と言っていいかもしれない。そこで「奇跡」という言葉は多様に解釈できることを訴えたのである。結論として、新幹線網が発達することで、日本の時間地図は縮まっているが新潟県もその中にあり、新潟県自身がその時間短縮によるさまざまな奇跡（恩恵）を受けたのではないかとしたのだ。

と言って、そのように新幹線というテーマ、即ち「鉄道の展覧会」において技術開発、震災復興、経済振興などを単純に「総合」したものではない。一般的に新幹線を語る時には有り勝ちといえる要素だからである。

本展で「総合」的要素の一つとして考えるのが、考古資料の活用である。上越新幹線開発に伴い発掘調査が行われ、さまざまな遺跡から、さまざまな遺構、遺物が検出された。中には初めての発見例という貴重な遺跡も認められる。群馬県高崎市の三ツ寺Ⅰ遺跡で、古墳時代の豪族居館が発見され、その居館の発掘時の模型や土師器、須恵器、滑石製模造品、木製品などの出土遺物を展示した。そのほか、縄文土器（埼玉県深谷市東光寺裏遺跡の前期・諸磯式土器、群馬県みなかみ町深沢遺跡の後期・加曾利B1式注口付双口土器、新潟県三条市長畑遺跡の晩期土器群）も展示し、鉄道から派生する諸情報に気づかせることとした。

いずれにしても、鉄道の展覧会と思いきや、縄文土器や豪族居館の模型などが目に入る展示である。それは、考古学の展示ならば、開発行為に伴う発掘調査の存在を知らしめるのは当然と言えるのに対し、鉄道の展示で考古資料を見るという意外性から開発と発掘調査の関係に気づいてもらうということに期待した結果である。とは言え、分野横断に基づき、多くの気づき

を得られることに繋がるのであり、「総合」的な発想が認められるものだったのではないかと考える。

### ③「黄金期の浮世絵—歌麿とその時代—」（平成26年度）

全国巡回展を招致した事例である。

巡回展であるため、パッケージ化されたものを博物館の展示室で展開すれば事足りるのであるが、そこに2つの味付けを試みたのが本展である。

まず、浮世絵に描かれた生活道具の数々を、その実物を展示することで、美術展示と歴史展示（または民俗展示）を「総合」した。

例えば歯磨き関係資料。巡回作品の錦絵に「教訓親の目鑑 ぐうたら兵衛」（喜多川歌麿作）があり、右手に房楊枝（いわゆる歯ブラシ）、歯磨き粉（作品内は歯磨き粉袋）、うがい茶碗が描かれている。髪がやや乱れ気味の“ぐうたら”な女性を描いたものだが、手に持つ歯磨き用一式には気づきづらい。そこで、その実物資料を日本歯科大学新潟生命歯学部医の博物館から借用し、展示した。ほかにもキセルを燕市産業史料館から借用するなど、作品に描かれている道具類の展示を行ったのである。ただし、錦絵作品とセットにして展示するに至らず、そういった資料類をコラム展示「浮世絵に描かれた生活道具」の一か所に集めたという意味では「総合」ではなく「総合」的な意味と留まった恐れはある。

もう一つは、日本アニメ・マンガ専門学校との連携によるマンガの採用である。展示される浮世絵は、およそ200年前の“古い”資料故、うやうやしく見られるものかもしれない。しかしそれはいわば江戸時代のポップカルチャーであって、現代のポップカルチャーの一つであるマンガと性格は大きく変わらないはずである。そこで、同専門学校と連携することで新旧のポップカルチャーを対比させることを考えた。結果として、展示される予定の浮世絵作品をもとに、学生により現代的視点を加えたりメイク作品を最後のコーナーとして展示することとした。例えば、肉筆画「手紙を読む花魁」（喜多川歌麿作）は紙の手紙を読む花魁の姿を描くものだが、専門学校生は紙の手紙の代わりにスマホを持たせメールを読む姿に変えるといった具合に、さまざまな工夫がなされていた（山本 2022）。

そのように、浮世絵という作品展示に留まらず、生活道具やマンガを採用したのは「総合」的視点と言えるかもしれない。ただし、展示空間上は「総合」的な雰囲気には留まったのではないかとも思う。

以上のほかにも、「移民物語～弁当からミックスプレートへ～多文化社会ハワイの日系アメリカ人」（平成14年度）は展示のみならず学校向けの特別授業など様々な方策に打って出て、総合学習の先取りの感があったと思う。また「博物館のウラおもて—レプリカの真実—」（平成15年度）では考古資料を中心としつつも身近なレプリカとしての食品サンプルなども導入し、多角的な理解に結び付けようと試みている。さらに「UMIAGARI—海揚がり—日本海に沈んだ陶磁器」（平成27年度）では上記の「黄金期の浮世絵」に続き日本アニメ・マンガ専門学校の協力を得て、歴史・考古のみの展示という印象を崩しつつ、また、展示室を地図化することで、歴史事象と地理的事象の総合解釈を試みたところである（山本 2019、山本 2022）。

このように、他の担当した展示においても、ある一定の分野に留まらず、学校の総合学習の教科横断のごとく分野横断の上で「総合」しているものと説明し得る要素をそれなりに持っていると考え。そしてこれらの内容をもって、金子和宏氏が言い、求めてきた「総合学習」への回答の一部とした次第である。

## (2) 新潟県立歴史博物館以外の事例から

新潟県立歴史博物館以外ではどうか。

最近の事例で若干見てみると、以下のように総合展示と見て取れるような例に出会うことは多々ある。なお①③は筆者自身の眼で確認しているが、②④～⑥は未見・非見であり、チラシ、HP、SNS、展示批評などの情報をもとにしている。

### ①徳島県立博物館

徳島県立博物館は令和3年にリニューアルオープンし、「総合博物館」として歴史、民俗、自然史など多様な分野の展示が「総合」した博物館であるが、「総合展示」の要素も確認し得るものとなっている。

例えば、考古学を基本とするコーナーにて「赤色顔料」の説明をする中で、若杉山辰砂採掘遺跡などを紹介するのは当然として、地学の学芸員により辰砂が硫化水銀によるものであることを説明するなど、分野を超えて「総合」＝「総合」した解説が認められる点は、リニューアルされてのことと見受けられた。多くがそのように「総合」化したとは言えないものの、一つのテーマについて分野を超えたさまざまな視点があることを示唆することが望まれることを示していると考えるのである<sup>(5)</sup>。

### ②厚木市立あつぎ郷土博物館

厚木市郷土資料館を廃し、令和元年1月に開館した郷土博物館である。「基本展示」と「融合展示」で構成されると言い、「基本展示」は「厚木の風土を望む」(地学)、「あつぎの大地から」(考古)、「あつぎの原風景を訪ねる」(歴史)、「あつぎの人、くらしに出会う」(民俗)、「あつぎの環境と生きものを探る」(自然)と、人文系、自然系の5分野が扱われた「総合博物館」となっている。そこに「融合展示」が加わると言う。

基本展示室の中央に位置し、年に一度の展示替えを想定され、ある一つのテーマについて分野を横断して展示がなされるとのことである。一例として令和4年度は「火」をテーマとして、「歴史」からは日蓮の「星降りの奇瑞」、民俗からは「火事」が取り上げられるといったように、多角的な切り口で展開されるようになっている(山下 2022)。

つまりここで言う「融合展示」は、分野横断の好例と理解できるもので、さらに「総合展示」と言い換えられるものではないかと考えるところである。

### ③小松市立博物館・企画展「博物館のうらがわ」(令和4年度)

タイトルからその内容がおおよそ理解可能なもので、つまり、資料の収集、保管、展示など博物館の一般には目に触れづらい機能を紹介するものであった。それはまさに筆者が言うところの“博物館学の展示”(山本 2013、山本 2022)である。

その中で「資料のウラバナシ」というコーナーを設け、さらに「いろいろ解説コーナー」と

して4分野の異なる解説を付していた。「展示されている資料について、美術、考古学、歴史学、自然科学の4人の学芸員が解説文を書きました。同じ資料でも、それぞれの解説はどのように違うのでしょうか。」とあって、それぞれの解説を読み込ませる工夫がなされている。

例えば「鬼瓦」。

「歴史」では聖武天皇が建立を命じた国分寺の屋根につけられたこと、室町時代には瓦葺きされた建物の多くに使われたことなどを、「考古」では二ツ梨豆岡向山窯跡（小松市）からの出土であること、表面の木目から木型（范型）に粘土を押し込む方法で製作されていること、「美術」では鬼の面をかたどったその意味（魔除け厄除け）や、顔の表情などに注目した解説がなされていた。また「自然」では素材としての「粘土」に注目し、地形学などの分野では粉のような土のことであり、鉱物学では粘土粒がどんな成分できているかという科学的特徴で区別していることなどを解説していた。

ほかに、「貝」（「歴史」は貝覆、歌貝、「考古」は貝塚、貝輪、「美術」は螺鈿、「自然」は腹足類、二枚貝類といった分類など）と「磁器」（「歴史」は若杉窯から若杉製陶所への変化、「考古」は若杉窯跡の発掘調査と灰原からの出土品の説明、「美術」は染付技法や中国製品の写のこと、「自然」は絵具、つまり金属粒子＝コバルト、マンガンなどについて）を展示し、それぞれ解説を付していた。

ここでも一つのテーマに対し異なる解説を「総合」するように見えるものの、それは見るものが「総合」して解釈できる仕掛けとして十分効力を発揮していると思われるものであった。

#### ④大阪市立自然史博物館・テーマ展示「田中秀介展 絵をくぐる大阪市立自然史博物館」

（令和4年度）

常設展示の第2展示室で行われた試み。この展示室そのものを描いた絵画を、モチーフとなった展示室内で鑑賞するというものである。田中秀介氏の作品によるもので、「自然史博物館は、自然科学についての学びを体験できる場ですが、美術作品を自然史博物館で鑑賞する試みは、誰しにも新たな体験となることでしょう。」とする。それは分野横断であり、また描かれている資料自体を同じ場で観るということは新たな感覚を生み、「総合展示」に昇華できた可能性を感じる場所である。

#### ⑤平塚市博物館・令和4年度秋季企画展「星になった民具たち」

天文学を専門とする学芸員と民俗学を専門とする学芸員とが担当して人文・自然の二分野による「総合」企画となった好例。桑原昭二氏の『星の和名伝説—瀬戸内はりまの星』（1963年、六月社）などをもとに、例えば「マングワボシ（馬鋏星）」の解説を天文学の見地から行い、そして「モノの物語」として民具としての「マグワ」の解説を「総合」させている。それにより、分野横断した理解に十分至らせことができているのではないかと思われる（塚田・福田2022）。

以上のように、分野横断は徐々にその例を増しており、それが通常になればなるほど、「総合展示」から「総合展示」へと確実に変化していくことが期待できるし、今後の博物館の姿勢として求められていくべきものではないかと考えるのである。

### おわりに—総合博物館か総合博物館か—

加藤有次の言う「総合展示」ではなく「総合展示」というのは、さらに一歩進めて博物館そのものにも適用できるだろう。と言うよりも、そうあるべきとも考えるところである。

世に言う総合博物館の多くは、歴史民俗系博物館や自然史系博物館などと言うところの歴史・民俗・自然史・美術など、各専門分野をそれぞれで展示展開し、一か所（一館内）に集合させたものに過ぎない。しかし、分野横断の方法を駆使し、一つのテーマで種々「総合」化することは可能なはずである。既に徳島、厚木の例を示すことができるように、その可能性は広がるはずであろう。

また、専門分化した博物館においても同様である。

新潟県立歴史博物館においては、常設展示ワンポイント解説と称して毎週土日午後短時間の解説を学芸員が交代で行っているが、その中では歴史的、民俗学的、考古学的な説明にとどまらず、さまざまな観点での解説を心掛けている。例えば石器を解説する際には鉱物学の情報を加えて解説をすることを心掛ける学芸員の存在もあるし、また時には県内他機関から学芸員などを招聘しゲスト解説として、分野を超えた解説を行ってもらうこともある。そのように、作り上げた展示を如何に「総合」として昇華するかは、手段次第と言える。

つまり、「総合博物館」は特に多分野にわたることから「総合博物館」化を目指すべきだし、歴史民俗系博物館、自然史系博物館、美術系博物館（美術館）など専門分化した館も、種々の分野交流によって、「総合博物館」化を目指すべきではないかと考える。

金子和宏氏に端を発した「展示は総合学習」であるが、それは博物館の眼につきやすい機能としての「展示」に対するものであって、博物館活動の諸相までは辿り着いていない。しかし、さまざまな資料について、来歴を記録するのは当然として、調査研究を進めるにあたっては、さまざまな分野の融合が必要不可欠であるし、展示以外のいわゆる教育普及も、さまざまな分野の応用、活用から「総合」すべきと考える。つまり、「博物館は総合学習」と言うべきなのかもしれない。今回は展示を主体に述べたのだが、今後は「総合博物館」とは何かをさらに追究できればと思う。

以上、「総合」について、あくまで筆者の覚書として稿を草したのであるが、筆者の説明以外にもさまざま解釈できる可能性はあると思う。さらなる説明の可能性も見出せればと思うし、単に説明に留まることなく、今後も「総合」展示、「総合」博物館という視点を念頭に置きつつ、成し得る博物館活動を推進したいと考えるところである。

### 註

- (1) 火焰街道博学連携プロジェクトと称し、2003年度から2020年度まで18年間実施した。その内容は（山本・金子 2008）など、随時報告している。
- (2) 名古屋市科学館のプラネタリウムでは、「誰かが書いた台本を読むのではなく、個々人で考え、個々人の表現で解説をする」とし、「全員が「解説員」ではなく、「解説者」であること」を旨としていると言う（中日新聞出版部 2016）。本稿の表現はその援用である。

「総合」についての覚書

- (3) 1997年発行の第四版第六刷にて確認。以下同じ。
- (4) 初版は明治30～35年(1897～1902)の刊行であるが、今回は平成6～8年(1994～1996)刊行の修訂第二版にて確認した。
- (5) 解説の総合化の視点は、胡光も指摘しているところである(胡光 2022)

**引用参考文献**

加藤有次 1977『博物館学序論』雄山閣

胡光 2022「徳島県立博物館 リニューアルによせて」『地方史研究』第420号、地方史研究協議会

中日新聞出版部 2016『星空の演出家たち—世界最大のプラネタリウム物語』中日新聞社

塚田 健・福田麻友子 2022『星になった民具たち』平塚市博物館

諸橋轍次 1897～1902『大漢和辞典』大修館書店

山下春菜 2022「厚木市立あつぎ郷土博物館 「基本展示」・「融合展示」を見学して」『地方史研究』第420号、地方史研究協議会

山本哲也・金子和宏 2008「史跡、博物館と地域連携—新潟県・信濃川火焰街道の活動と博学連携—」『國學院大學考古学資料館紀要』國學院大學考古学資料館

山本哲也 2013「博物館の機能を展示する視点—“博物館学の展示”の提唱」『博物館研究』Vol.48No.8「博物館の機能を展示する視点」日本博物館協会

山本哲也 2019「モノの展示からコトの展示へ—UMIAGARI—海揚がり—展における試みから—」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第20号、新潟県立歴史博物館

山本哲也 2022「企画展でマンガを活用—新潟県立歴史博物館の事例から」『博物館研究』Vol.57No.7「解説ツールとしてのマンガ」、日本博物館協会

山本哲也 2022「“博物館学の展示”の可能性—企画展をとおして保管機能を普及啓発する—」『博物館とコレクション管理—ポスト・コロナ時代の資料の保管と活用—』雄山閣

(新潟県立歴史博物館)